

卯の花の 咲く月立ちぬ

ほととぎす 来鳴き響めよ 含みたりとも

大伴家持 卷十八・四〇六六

ったことでしょう。

草花を知らない私は、7年前にはウツギがどの花か分からず、採集するのに必死で鳥の声にまで気が向きませんでした。今年、

私は昨年から万葉文化館に勤めています

が、実はそれ以前にも

当館で働いていたこと

があります。7年前の

今ごろは、大学院に在

籍しながら、館内にあ

る万葉図書・情報室で

司書補助の仕事をして

いました。図書室では、

年に何回か押し花を使

ったしおり作りなどを

開催しており、よく季

節の草花を採集に行っ

たものです。その中に

「卯の花」——現代で

はウツギと呼ばれる花

もありました。今年の

開花は早いようで、4

月下旬にはもう、図書

室の大きな窓からウツ

ギが咲き乱れているの

が見えるほどです。

この歌は、748(天

平20)年4月1日に、越

中国の守(長官)だった

大伴家持が、宴の際

に詠んだ歌です。「卯の

花が咲く月になった」

と歌うのは、4月の花

やまと
万葉がたり

の代表格が「卯の花だ

ったからでしょうか。

この日は、太陽暦では

5月6日あたり、ち

ようと今ごろになりま

すが、花はまだつぼみ

だったようです。

「卯の花」とともに

詠まれるのは、ホトト

ギスです。この花と鳥

は合わせて詠まれるこ

とが多く、初夏を代表

するものとして認識さ

れていたのでしょうか。かりです。どうやらこ

しかし、この歌の内容

から考えると、ホトト

ギスは鳴いていないよ

うです。同じ宴会で詠

まれた歌は、ほかに3

首ありますが、いずれ

もホトトギスの鳴き声

を聞きたいと願う歌は

者、さぞかし残念だ

【訳】卯の花が咲く月になった。ほととぎすよ、

やって来て鳴き声をひびかせてくれ。花はまだ

つぼみであろうとも。

家持たちが聞けなかつたホトトギスの鳴き声を聞いてみたいと思います。「ほととぎすよ、やって来て鳴き声をひびかせてくれ」(県立万葉文化館研究員・吉原啓) 原則、隔週掲載

うつそみの 人にあるわれや

明日よりは 二上山を 弟世とわが見む

文献に見える大来皇が葛城の二上山に移し女の事績は、悲しい出来事ばかりです。彼女は、およそ7歳で母と死別し、13歳の頃には伊勢の斎宮となること
が決定したため弟である大津皇子と離れて暮らすなど、幼い頃から肉親との離別を経験して
いました。

さらに、弟の大津は皇位継承に関わる謀反の罪で死を賜ります。この歌は、大津の遺体

が葛城の二上山に移し葬られた時に詠んだ歌です。この時大来は、弟の事件のために斎宮を解任されて帰京していましたが、弟のいな
い都に戻って来てしま
ったことの寂しさは、いかほどだったこと
でしょうか。

こうして見ると、彼女の人生は悲しみに染まっていたように見えますが、それだけではない史料も見つかつて

やまと 万葉がたり

います。

万葉文化館が建つ場所にある飛鳥池工房遺跡からは、大来の名を記した木簡(木に文字を書いたもの)が出土しています。「大伯皇子宮物 大伴□□□品 并五十□□(□は読めない文字。…は複数の木簡の間接続を示す)。

この「大伯皇子」は大来皇女のこととされ、大

大来皇女 巻二・二六五

来が帰京後に住んでいた宮が工房に物品を発注した際の木簡のよう
です。大来の日常の記録であるこの木簡から、悲しいばかりでない、普通の日々を生きようとした一人の皇女の姿が伝わってきます。

他にも飛鳥京跡から出土した「太来」と書かれた木簡の削り屑は注目されます。同じ場所から「大津皇など他の皇子の名を書いた」とおぼしき木簡が発見されています。この機会に、ぜひご覧ください。

(県立万葉文化館研究員・吉原啓)

原則、隔週掲載

【訳】現し身の人である私は、明日からは二上山をわが弟と見ようか。

読めない部分には、せめて悲しくないことが書かれていてほしいと願ってしまいます。

さて、万葉文化館では、「大伯皇子宮物」木簡(複製)を特別展示室で常設展示しており、「太来」木簡(複製)は7月11日まで一般展示室で大来とのともに展示しています。

暇無み

来ざりし君に

ほととぎす
霍公鳥

われかく恋ふと

行きて告げこそ

おわともそのかのうみのいうつめ
大伴 坂上 郎女 巻八・一四九八

訪れなかった恋人へ、「かく恋ふ」と鳴く「霍公鳥」に私の恋心を届けてほしいと訴えています。郎女流の戯れの歌で、約束をすっぽかしたお相手はきつとドキツとしたことでしよう。万葉びとたちがこの奈良で聞いた鳥の鳴き声は、1300年経ってもきつと同じ音色であることと思えます。

明日香村で働くようになり、自然の奏でる音に耳を傾けるようになりました。川の流れる音や、万葉文化館を囲む竹林が風にそよぐ音など。中でも、私の一番の楽しみは鳥の鳴き声を聞くことです。早春に、冬の間じっとしていた鳥たちの囀る声が聞かれると、もうすぐ春が来るのだな、と実感できます。まさに、額田王が「冬

ごもり 春ざり来れば 鳴かざりし 鳥も来 鳴きぬ…(冬が過ぎて 春がやって来ると、今まで鳴かなかった鳥も来て鳴く)」「(巻一・一六)と詠んだとおりです。 5月の楽しみは、ホトトギスの鳴き声を聞くことです。その初音を聞くことを万葉びとたちは楽しみにしており、特に大伴家持はホトトギスを詠むことに

やまと 万葉がたり

とても熱心な歌人でした。そのホトトギス、「万葉集」では多くが「霍公鳥」と表記されます。しかし、この用字は万葉びとたちが参照した古代中国の文献には見当たりません。現存しない古代中国の文献で、「霍公(鳥)」と書かれた例があったのではないとも言われますが、多くの見解

があり、さまざまな謎を秘めています。この歌の「われかく恋ふ」は、ホトトギスの「カクコウ」という鳴き声の聞きなしではないかとも言われています。「カクコウ」と鳴くのはカクコウではないか? と思っ 作者の坂上郎女は、

【訳】暇がなくて来なかったあなたの方に、霍公鳥よ、私はこのように恋うっていると、行って告げてほしい。

(県立万葉文化館主任 研究員・大谷歩)

|| 原則、隔週掲載